

国語科教育の目標と言語観

後 藤 恒 允

The Aim of Japanese Teaching and the Linguistic Theory

Tsuneyoshi GOTO

The purpose of this paper is to discuss about the relation between the application of linguistic theory to and the aim setting of Japanese teaching. So we examine, for example, the one between "the language-

process theory" by S.Tokieda and Japanese teaching based on it. Comparing his theory with others, we clarify the merit and problem of Japanese teaching based on it.

はじめに

国語科教育の目標は、その時代の社会的な要請や学力論などに基づいて政策的に教科の目標として決定される。しかし、言語をどのように捉えるかという言語観の問題を抜きにしては論じられない。もちろん、言語観の問題は、政策論上の意図から特定の言語学の立場が選び取られて国語科教育の目標が決定されるという両者の不即不離の面もあって、ことは単純ではない。しかし、言語観の問題を純粋な言語学上の問題として取り上げ、それぞれの言語学説が国語科教育に援用されて、国語科教育の構造や方法をどのように規定し、学習者にどのような国語学力をつけどのような言語活動・言語行為をひきおこさせていくことにあずかっているか、ということを考察し検討を加える視点も必要である。言語の捉え方が根底において国語教育の方向を決定しているとすれば、言語観の問題は看過できない重要性をもってくる。本稿では、例として時枝誠

記の言語観とそれに基づく国語科教育論を、別の学説との対比を通して考察し、彼の国語科教育論の功績と課題について検討を加えることにしたい。この考察と検討に託して、私自身が、言語観と国語科教育目標論との関係についてどのように考えているかをにじみださせてみたい。

一

時枝誠記は、言語の本質に関して言語過程説という一つの仮説的理論を立てた。時枝は、日本古来の言語観を研究し、自らも国語の特殊な姿を実証的に研究することによって、言語の本質とは、言語主体が聴覚映像↓概念と継起的に連合する過程であると規定したのである。時枝は一方、ソシュールの学説を「構成主義的言語観」、「言語実体観(↓)」と批判し、言語過程説をもって対立しようとしたのである。なぜなら、ソシュール

ルが「言語」を自然科学の対象のように「音声と意味との結合」したものと考へ、「言語」を「主体」から離れて「客体的」に存在する「実体」と規定した、と独自の解釈をしたからである。

言語過程説に基づいて独自の文法体系を構築した時枝の創造力に、われわれはまず敬意を表し、その学説内の理論の整合性を評価せねばならない。また、具体的な言語行為についての考察を、国語教育に適用した功績も見逃せない。しかし、言語過程説は、誤ったソシュール解釈や古い言語観に基づいており、そこから導かれた国語教育論は次の例のように技術偏重の面を強めて行った。そして、それが昭和三十年代の学習指導要領に反映され、以後も理論や実践に影響を与えることになった。言語過程説を築く過程そのものに問題があったとすれば、われわれは、知の組みかえによって、時枝の国語教育論をその生成の場から根本的に捉えなおす必要がある。

① 国語教育の目的は、獲得される知織や思想にあるのではなく、それを獲得する手段即ち読み方、聞き方にあるのである。

② 「ハナ」といふ音声を聞いて「花」を思ひ浮かべるといふ連合の作用が繰り返されることによって、連合が習慣的になる。国語教育は（こうした連合の習慣を一定期間内に、計画的に築き上げる）後藤補筆）訓練学科である。

③ 国語教育は（自己の言語行為を調整するところの）後藤補筆）技術教育である。(2)

④ 国語教育は、国語の実践主体である生徒の実践の訓練に関することであって、（理科や社会のように）後藤補筆）認識主体の訓練ではない。(3)

⑤（批判について）——国語科の重要とする問題は、それらの読みとられた内容に関することなく、自己の読む態度について、あるいは方法について反省し批判することである。(4)

以上の抄出引用は、原典の文脈に即して理解されないと、時枝の真意

が十分に伝えられない。しかし、時枝の描いた、話し手から聞き手への遂行受容過程図（『国語学原論』九一頁）で補うとき、そこには次のような理論の方向が示されている。(ア) 思想（概念・表象）と音声・文字（聴覚映像）、すなわち内容と形式を三元的に分離し、(イ) 思想から音声へ、音声から思想へという継起的「過程」が焦点化されている。そして(ウ) その過程を教育的に訓練する方法を重視している。この遂行受容過程は、通信システムのモデルとはなっても、人間のコミュニケーションを説明するには不十分である。

こうした「技術教育」としての時枝国語教育論は、言語過程説の生成におけるどのような課題から生まれたのか。筆者は、それを解く鍵は三つあると考える。

一つは、「健忘性失語症」に関して、連合主義に立ったための限界である。「概念と聴覚映像とは、継起的過程として結合されてゐると考へ」た時枝の根拠は、後に全く否定されるのである。このことを、「健忘性失語症」に関するメルロ・ポンティの解釈と比べてみる。

二つは、現象学によって「詞」と「辞」の関係を補強しようとしたが、現象学の適用に時代的限界があったことである。時枝は山内得立を介してフッサールに触れたけれども、「世界定立」という初期フッサールの思考の範囲にとどまり、「世界内存在」を主題とする後期の思考に触れなかったことである。時枝には自他の交互作用を主題にする発想はない。このことの意味は重いのである。

三つは、周知のように、言語過程説が時枝のソシュール学説に対する誤解・曲解によって基礎づけられていることである。

これらは、時枝個人の限界ではなく、時代の限界であった。しかし、時枝がその限界から来る課題を克服せず、理論の固定化を図り、それを国語教育に適用して、行政の一翼を担いながら技術偏重の教育論を推進したことは、惜しまざるをえないのである。

ここにあげたソシュールの言語学とメルロ・ポンティの現象学は精神

的類縁性にあり、人間とことば、ことばと認識について、時枝とは根本的に違った視点を開示してくれるはずである。「語る主体」とはなにかを明らかにしてくれるはずである。

筆者は、現象学理解の浅さを自覚しつつ、言語過程説から導かれた国語教育論への疑問を生成の場に帰って考察し、そこから、時枝の否定した文学教育論の意義について触れることにしたい

二

まず、時枝がなぜ「言語」を「精神的継起的過程現象」としたのか、ということに触れることにする。これには二つの手続き上の問題があった。

第一は、小林英夫の『言語学原論』からの引用と活用のしかたに問題があった。

⑥ ソシュールもいふ如く、この「言語」なるものは、概念と聴覚映像とが密接に結合されて居って、互いに喚起し合ふ処のものである。

(『言語学原論』二五頁)⑥

ラングに対する説明を時枝はA Bに分け、Aについては「甚だ不明瞭な叙述である」として、ラングが概念と聴覚映像から成る不可分離の言語本質体であることへの無理解を明らかにする。一方、傍線部Bについては、訳書が納得できるとし、しかも「若し互いに喚起し合ふ処のものであるならば」という仮定の上に立って、それは「宛も、ボタンを押すことによって電鈴がなるといふ現象」のように「継起的過程として結合されてゐると考へなければならぬ」と結論するのである。訳文による仮定的推論によって恣意的な判断を下したことに問題があったのである。

第二は、かくして判断した「継起的過程」を、「認知不能症」や「健忘性失語症」をひきあいにしながら、大脳生理学によって証明しようとした点である。

失語症とは、大脳の言語中枢が損傷したとき、言語機能に障害が起こ

る状態のことである⑥。失語症とは、時枝のいうように、十九世紀後半までは確かに連合主義の立場から説明された。つまり、大脳中に、いくつかの言語中枢を想定し、たとえば感覚性言語中枢には聴覚性の語詞映像が貯えられているといったように、ある神経機構の刺激によって、特定の中枢が特定の語詞映像を再生し言語活動をひきおこすと考えるのである。そして、失語症を、いくつかの中枢の連合の損傷によって、ある語詞映像が再生されなかったり、語詞映像の貯えが失われた状態だと説明するのである。

しかし、連合主義による説明では、「言語活動とは神経機構の法則に従う語詞の再生」という第三者的な自動運動にすぎないことになり、『語る者は誰もいない』ということになってしまふ⑦。のである。

時枝の依った連合主義の立場は、今世紀になって、主知主義的な言語論にとって代わられる。時枝の言語「過程」説は、この時点で論拠を失い、崩れていたのである。そして、もし、成立するとしても、語る主体のいない「自動運動」にすぎないことが明らかになった。言語活動とは、主体なき条件反射の現象ではない。教師は生徒を決して主体抜きの「自動運動」に駆り立ててはならない。われわれはまずこの自明のことを確認しよう。

それでは、この主知主義の説明で十分なのか。たとえばここに、赤という色の名を忘れた色名健忘症の患者がいて、いろいろの色彩の混じった毛糸のサンプルの中から赤系統のものだけを選びだせないとする。主知主義の立場では、この症状について、患者が語詞を欠落したと、「いくつかの色を一つのカテゴリーに包摂する一般的能力を失った⑧」こととは、同じ原因だと考える。逆にここから健常者の言語活動を推測すると、言語活動とは、ことばに先立って既に存在している思惟に、人は外皮としての言語を着せることだということになる。メルロ・ポンティによれば、主知主義による説明も連合主義と同様、そこには「たしかに主体は存在するけれども、しかしそれは語る主体ではなくて思惟する主

体なのだ⁽⁹⁾」ということになる。国語教育についていえば、読書行為に先立って既に作品に内在している主題を読み解くことが学習活動だとする、ロゴス中心の読みがこれに当たると。文章になにが書かれているかを読み取ろうとすることは否定されない。しかし、それは己を虚しくして書き手と合一することではない。読むことは、既存の思想を翻訳する単なる標幟として、ことばを手段化することではない。

ことばは主知主義のように、ことばの外に思惟を予め想定するものではない。思惟とことばとは、「人間が〈世界〉へと自己を投企するその根本的な活動の二つの表出」として一体化されており、ことばによる「表現をつうじてこそ、思惟はわれわれの思惟となる⁽¹⁰⁾」のである。

メルロ・ポンティは、経験主義（連合主義）と主知主義のいずれの立場をも、「語は意味をもつ」状態たらしめること、「語る主体」を回復することによって乗り越えようとする。時枝も確かに「言語の本質を、主体的な表現過程の一形式である⁽¹¹⁾」と規定し、「主体」に注目していた。しかし、二人のいう「主体」の意味するところは全く異質であった。このことの重要性にも留意せねばならない。

それでは、一見自明な「語は意味をもつ」というこのことばの真意はなにか。ポンティは、「言葉とは一つの所作であり、その意味するところは一つの世界なのである⁽¹²⁾」という文によって明らかとする。

さきほどの色名健忘症の例でいえば、主知主義の立場では、患者は知的な分類能力を失ったと考えられた。しかし、患者はそれ以前に、赤系統のサンプルが集まって視野を分節化していることの経験そのものを失っているのであり、患者の内部では、その分節化と赤ということばの生きたつながりは失われている。患者にとって赤ということばは、何も語ってくれない、「己」を空虚にしてしまっただけにすぎない。

しかし、われわれにとつては、赤ということばは、その分節化の経験が間主観的に住みついたことばであり、また、われわれはこの実存的意味が住みついたことばで、そのことをともないつつ現実を分節化する。

したがって「言語とは、主体がその意味の世界のなかでとる、その位置のとり方そのものである⁽¹³⁾」ということになる。「世界」は、志向性をもったさまざまな実存が意味づけつつ意味づけられている相互作用の場であり、われわれはさまざまな身体的所作を通して相互作用を行っている。言葉とはその一つの所作であり、名ざしをする行為である。以上、言語過程説の「過程」という発想の依った根拠を明らかにし、その根拠が現在では否定されていることを考察してきた。そして、時枝の言語「過程」説に止まる限り、現実を分節化し意味づけるという意味での認識主体が重視されないことを明らかにした。

冒頭引用文④のように、時枝が認識主体を二義的に見たことは、歴史的状况のなかで見たとき首肯できないことはない。戦前の教育が皇国思想に生徒を心酔させることを目的とし、また戦後の経験主義による国語教育が言語能力を身につけさせる明確な方法を欠いていたとすれば、割り切った時枝の技術主義が一時期もてはやされたのも当然のことであつた。しかし、言語行為として、パロールとしての国語の教育によって、「言語において人間を取り戻さう⁽¹⁴⁾」としたせいかくの意図も、言語「過程」説に孕まれていた、「自動運動」的な語詞の再生、「語る主体」の無化という内部矛盾によって、「人間」を失った技術教育論に陥ったのであつた。

なお、本稿の主題から逸れるが、失語症の言語理論から、ローマン・ヤコブソンが結合軸と選択軸について考察を進め、これをもとに言語の六つの機能について言及していったことが想起される。また、ソシュールは、ヤコブソン以前に、ヤコブソンと発想を同じくする連辞関係と連合関係について考察していた。

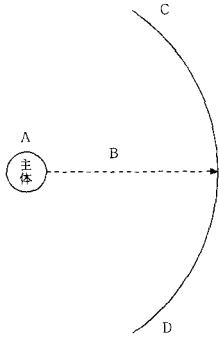
もし仮に、時枝がソシュールを正しく評価し、ヤコブソンに触れる機会があつたとしたならば、理論の内容がかなり異なり、国語教育に新しい地平をもたらしていただろう。

三

次に、言語過程説と現象学との関係について触れる。

時枝は京城大学在職中に、教授職を棄ててまでも、京都大学教授山内得立の講義を聴講しようとした¹⁵⁾。時枝にとって、山内の『現象学叙説』によって紹介されたフッサールの現象学は、「詞」「辞」の理論を基礎づけるために、現象学は重要な意味をもっていたものと考えられる。

ところで、『国語学原論』によると、言語の伝達過程は、話し手における具体的事物(表象)↓概念↓聴覚映像↓音声↓文字と、聞き手における文字↓音声↓聴覚映像↓概念↓具体的事物(表象)の、心的過程となる。時枝は、この過程のなかで具体的事物(表象)や、その概念化されたものを「詞」といい、話し手(主体)の判断、情緒、欲求といった「主観」が、概念過程を経ないで、直接聴覚映像を経て音声化されたものを「辞」と名づける。たとえば、私が、まわりに乱れ咲くコスモスに感動しながら「花よ」といったとき、名詞「花」は詞であり、感動詞「よ」は辞となるとする。このことについて、時枝は次図を利用しながら次のように述べる。



時枝説によると、「花よ」における詞と辞の関係は「花よ」という入子型の構造になる。

この時感動を表す「よ」は、客体界を表す「花」に対して、志向作用と志向対象との関係に於いて結ばれてると見ることが出来る。

言語主体を圍繞する客体界CDと、それに対する主体的感情ABとの融合したものが、主体Aの直観的世界であって、これを分析し、一方を客体化し、他方をそれに対する感情として表現したものが即ち「花よ」という言語表現となるのである。従ってこの詞辞の意味的連関は、客体CDを、主体ABが包んであるといふことが出来るのである(『国語学原論』一三七頁)。

このように、時枝は、詞と辞との結びつきを、「志向作用(ノエシス)と志向対象(ノエマ)との関係に於いて結ばれてゐる」と見たのであって、そこに、「純粋意識のノエシス・ノエマの構造を研究することによって、現象学的体験の本質を明らかに」しようとした『現象学叙説』の影響がみられるのである。

しかし、山内得立が『現象学叙説』(岩波書店、昭和四年)で考察したのは、初期のフッサールであった。本書での主題は「世界界定立」であって、現象学的還元によって、意識は、対象の本質をいかに志向し、対象を定立し、対象の存在意識を明らかにすることであった。したがって、ノエマよりも、ノエマの現象に意味を付与するノエシスの意識構造を解明しようとした。時枝の思考も当然この範囲に入るわけで、主体が客体をいかに意識し、言語化するかの心的過程の考察が主であって、そこに限界があった。

フッサールの後期のテーマは「世界内存在」である。前期においては、ノエシスの能動的な活動によって意味を付与されていた対象は、それに先立ってすでに構成されている「受動的」な存在と考えられるようになる。それは、外のおよび内的地平を潜在させており、われわれとのかかわりに於いて潜在的な地平は顕在化されてくる。世界とはこのさまざまな地平の錯綜する場であり、われわれはその世界に内属する「世界内存在」として、他者を構成しつつ他者によって構成される存在と考えられるようになる。この考えは、メルロ・ポンティに継承され独自の発展を見せる。

こうした流れのなかで主体と対象との関係をとらえるとき、発想に大きな相違があることが了解されよう。こうした視座から言語過程説を検討してみる。

右の引用文の傍線bで、対象は主体に対して「客体」の関係を置かれて客観化され、対象は私の感情によって一方向に統括されている。

いわば、対争は主体に従属する。対象は主体によってその存在意味が明らかになされ、主体の内部に取り込まれるや、主体内部の出来事として概念や音声に変えられ、音声によって聞き手に伝達されるにすぎない。表象化・概念化され、「詞」に言語化される過程でも、対象は主体と切り結ぶことなく、外在的存在となる。しかも主体の感情や判断によって包みこまれ、その対象となる意味で二重に外在化される。

しかし、杉山康彦が指摘するように、主体と対象とことばは互いに包み包まれるものとして「重層的な相関関係⁽¹⁶⁾」にあるはずである。また、「花よ」という詞と辞の關係は固定されたものではなく、「花よね」と「ね」がかわることによって「よ」も詞化される相対關係にあって、語と語は無限の重層的な相関關係をもって文を構成するはずである。しかし、ここではそうした「機微が見逃され」、「結局のところ過程説という非弁証法的な思考のなかに陥没してしまう」のである。

それでは、包むものが包まれるものになり、包まれるものが包むものになるといふ重層的な相関關係とはどのようなものか。

例えば、『生れ出づる悩み』の木本は、「私」に宛てた手紙のなかで、「山ハ絵具ラドツリツケテ、山ガ地上カラ空ヘモリアガツテルヤウニ描イテ見タイ」と決意を述べる。確かに山は一つの客体としてそこにあり、知覚される。しかし、画家としての「眼」を獲得しつつある木本にとって、山は単なる客体であることを超えて、量感をもった一つの実存として、さまざまなパースペクティブを見せ始める。木本の「眼」の変化に応じて、山は山そのものとして生起し顕在化したのである。第二節に戻っていえば、「山ガ地上カラ空ニモレアガル」という表現は、山

に対する感情とか判断ではなく、木本による山の意味づけなのである。同時に、その意味づけを通して、木本は、画家としての世界に対しつつある自らの態度を意味づけられたのである。

一方、文学が生活かの選択に苦悩する「私」は、また、画家として対象に肉迫する真の「眼」を獲得していく木本が、さまざまなパースペクティブを構成し、それを一つの作品世界に結実していくという造形作用を介して、小説家として自立する自分を意味づけていった。

「現象学的世界」とは、このように「私の諸経験の交差点で、それら諸経験のからみ合いによってあらわれてくる意味なのである⁽¹⁷⁾」。この世界のなかでは、私は他者 \parallel すべての現象によって意味づけられ、また意味づけている存在である。他者を構成し、他者によって構成されつつある存在である。いわば、私は世界 \parallel 内 \parallel 存在として他者との相互作用のなかにおかれ、互いの「存在の創設⁽¹⁸⁾」に立ち会っている存在であるといえる。

以上、対象を「構成」するとはどういうことか、あるいは志向(指向)作用とはなにかということに触れてきた。私と対象との關係は、主体が客体を統覚する關係ではなかった。いわば主体 \parallel 主体の關係にあって、その存在の意味を互いに「生まれ出づる状態において捉え⁽¹⁹⁾」ていこうとする間柄こそ主体と対象との真の間柄であった。

しかし、時枝説では、言語主体と対象とをこうした弁証法的な相互作用の關係におかない。包み包まれるこの關係は、包まれる対象が主体を包みかえずという關係にはならないのである。この關係を反映した詞 \parallel 辞のつながりも「もっぱら主体の内側の出来事として、単なる主体の過程としてのみとらえられ」る。時枝には、「言語を現実的对象に対する主体の行為としてみる観点が欠けている⁽²⁰⁾」のである。時枝はせっかく現象学に触れながら、言語と認識、主体と対象との間に血の通った關係をつくるができなかった。

また、心的過程の出発点で、「具体的事物(表象)」と表現したことに

も問題がある(2)。時枝が「表象」に()をつけたのは、具体的事物やその表象という意味であろう。しかし『現象学叙説』では、表象とは対象を単に指示する意味のことではない。対象を「存在するか又は存在しないものとして決定しようとする」(二三〇頁)ノエシスの「信念様相」であると規定している。主体がものの存在を措定するために言語を媒介させること、そこにこそ、対象と主体とことばのかかわりが生まれてくる。ノエシスとは「生理現象に伴伴する心的事実」でもなく、単に「物的現象に相対する精神的過程」でもないのである。

以上、詞辞論を補強するために、時枝がどのように『現象学叙説』を援用したか考察してきた。時枝は、主体と対象、詞と辞の関係を、包み込まれるものとして捉えた。そこには包むものと包まれるものが弁証法的な相互関係に発展する可能性があった。しかし、「結局のところ過程説という非弁証法的な思考のなかに陥没してしま」ったのである。

以下、この時枝説の「非弁証法的な思考」に焦点をあてて、時枝の意味論や文学教育論を検討していくことにしたい。

注

- 1 時枝文誠記『国語学原論』序 岩波書店 昭和十六年。
- 2 引用①②③は、時枝誠記『改稿 国語教育の方法』有精堂 昭和四五年による。
- 3 引用文④は、時枝誠記「国語科学習指導要領試案(総説・購読論)」による。
- 4 引用文⑤は、「国語教育の基礎的な諸問題」(『実践講座国語教育』牧書店 昭和三五年)による。
- 5 1に同じ 八四頁。
- 6 木田元『メルロポントイの思想』岩波書店 昭和五九年 V章を参照。
- 7 6に同じ 一八三頁。メルロポントイ 竹内・小木訳『知覚の現象学Ⅰ』みすず書房 昭和四二年 二九〇頁。
- 8 『知覚の現象学Ⅰ』三三三頁。

- 9 8に同じ 二九〇、二九二頁。
- 10 8に同じ 二九二頁。
- 11 1に同じ 五頁。
- 12 8に同じ 三〇二頁。
- 13 8に同じ 三一六頁。
- 14 時枝誠記『国語学原論 続篇』岩波書店 昭和三十年 六頁。
- 15 根来司『時枝誠記研究』明治書院 昭和六十年 第二章。
- 16 木田元『現象学』岩波書店 昭和四五年 三一頁。
- 17 杉山康彦『言語と文学』(『文学』岩波書店 一九六四・八)。
- 18 16に同じ 三一頁。
- 19・20 8に同じ 二二頁。
- 21 8に同じ 二五頁。

四

以上からも明らかのように、時枝の詞辞論では、詞と辞を「対立させ」ていた。そして、詞よりも、詞を包み統一する辞の統一作用を重要視していた。そこから、理解とは、「詞の表象化を」「追ふ」のではなく、「表現者の統一作用を理解す(一)」べきだという、読みの理論が導かれる。長い問学校文法の主流となっていた橋本文法の文節論と比べたとき、この説は、確かに読みの本質を突いていた。「作者の統一作用」を正しく理解すべきだとする時枝の主張は、一面では正しい。しかし、次のようないろいろの問題をかかえていた。

第一の大きな課題は、意味論上の問題である。

ことばの意味とはなにか、その規定のしかたは多様であって、定説はない。それぞれの説に長所短所があり簡単に優劣はつけがたい。

時枝の意味論は、仮に命名すれば、「場面」的意味論であるといえよう。ここにいう「場面」は、話し手を包む状況だけをさすのではなく、状況に対する話し手の「態度、気分、感情」といった反応をも含むので

ある。この「場面」的意味論は、前節の「志向」作用の図式と連動している。「場面」とはC DとBの融合、つまり、状況(対象)に対する話し手の反応であって、意味とは、「場面」に制約された、話し手の「事物や事象に対する把へ方」をさす。時枝の意味論は、このように、具体的な言語行為の場における話し手の作用を重視する点に特色がある。時枝のこの考え方からすれば、ソシュールの「言語」は、「話し手の機能を除外した処の存在」にすぎない。生活の具体的事象、実態として言語を捉えようとした点では、ソシュールを正しく批判していたといえる。

書き手の対象把握の仕方を読むことは、読みの指導でも有効に生かさねばならない。たとえば、説明的文章の指導において、そこに書かれた事実や論理を読ませて終わるのでなく、書き手がその事実をどのような視点から選択し、それにどのような態度をとってどのように表現したかを読ませることは大切である。

時枝の「場面」論的意味論、意味作用論はしかし、次のような問題点を孕んでいた。

(ア) ことばの本質、つまり、ことばは意味するものと意味されるものとが一体化する場であることを、時枝が否定したことである。

この原因は第二節で述べたように、聴覚映像と概念を継起的過程として捉えたことにあった。時枝は、「言語」を聴覚映像と概念とが一体となった「単一単位」でもなく、それらの「結合とも考へ得られない」ものとして、あくまで継起過程であることにこだわった。

また、意味するものと意味されるものとを引き離そうとした原因は、第三節で触れた「詞」と「辞」との関係づけにもあった。時枝は、「詞」を、「言語を構成する内部的な要素」と見ず、聴覚映像に対応するものとも見ない。概念や表象や素材は、あくまでも話し手の意味作用の対象であって、ことばの外におかれる。素材は話し手のものの見方がつけ加えられると、ことばによって読み手のもとに搬ばれるとするのである。このときことばは、ことばの外におかれた素材を運搬する手段にすぎない。

くなる。

⑦ 言語は宛も思想を導く水道管の様なものであって、形式のみあって全く無内容のものと考えられるであらう。しかしそこにこそ言語過程の成立の根拠があるのであり、意味の本質もこの様な形式自体にあると考へなくてはならない。

このように、ことばの本質は、思想をはこぶ働きそのものにあると考えた時枝は、必然的に次のような国語教育の方法論を唱えることになる。

⑧ 国語教育は、児童生徒に、どのやうな思想を与へるべきかを第一に考へる必要はない。むしろ、どのやうな思想をも、正しく読む能力を与へることを第一とすべきだ。

この考え方は、冒頭引用文①と同じように、「獲得される知識や思想」の内実よりも、それを読み取り聞き取る方法を重視している。この視点も全くは否定できない。

しかし、ポソティによれば、言葉と意味とは「たがいに包み合っ」た一体であり、「意味は言葉のなかにとり込まれ、言葉は意味の外面的な存在」であった。言葉は「思惟の身体^②」であった。そうだとすれば、よりすぐれたことばの意味内容、すなわち、すぐれた文章に内包された豊かな思想や感動を、与えることの重要性を、われわれは再確認せねばならないのである。

(イ) ソシュールのいう恣意性、差異といった基本概念に対して、時枝の体系的な論及がない。また、これに関係のある意味の重層性や転用についても、時枝がどのように考察していたか、検討の余地はある。このことについて簡略に触れてみたい。

まず、この問題に関する時枝の主張と、ソシュール学説に対する時枝の疑問を整理すると次のようになる。(『国語学原論』)

a 1 意味は、ソシュールがいうように音声に対応する概念をいうのではなく、「場面」のなかで対象に対して取る話し手の態度をいう。

a 2 したがって次の場合は時枝説によると合理的に解釈できる。

a 2 1 たとえば、ある一つの素材を場面によって「ツクエ」「モノ」と違った表現をするのは、話し手の違った把握のしかたをさすのである。それに応じて、同じものが違った意味志向対象となる。

a 2 2 ある人が山道で折った木の枝を、体を支える道具に使用おうとしてこれを「杖」にしようと言えるのは、折った瞬間その人が杖を杖として把握したからである。

a 3 一方、ソシュールのように、意味を音声や文字に対応させると次のような不合理が起きる。

a 3 1 a 2 1 の「モノ」は「モノ」という漠然としたものを指すから「モノ」は机を特定しない。抽象的な広義の概念は、その意味内容としてあらゆる事物を包含し指し示さねばならない不都合が出てくる。

a 3 2 a 2 2 の「枝」に代えて「杖」といったとき、「杖」ということばは杖というものと対応していなければならぬから、「杖」は具体的個物としてのものと枝を表わさなくなる。

a 3 3 桜を「花」、星を「花」といったとき、パロールにおける「花」と、ラングにおける「花」の関係はどうなるか。

a 4 時枝の説によれば、忌詞・比喩も「場面」的意味論で説明できる。このうち比喩は、素材に対する概念的把握を離れて「主体の素材に対する観察、味到を根柢とす」るところから生じる。たとえば、「木の葉が舞ふ」という表現は、「木の葉が散る」では表現できないものを話し手はその現象に見ているからである。したがって、比喩は、「単なる語の選択や修飾によるもので」はない。たとえば、

閑さや岩にしみ入る蟬の声

という句も、「蟬の声のかまびすしい現象を、『岩にしみ入る』現象として把握した処に、芭蕉にのみ許された対象の把握を見出すのである」。「ソシュールの見解に従へば」、詩人を「語を個性的にし、性格的に」する「語の限定者である」としているが、それは「根本的に修正されねば

ならない」。なぜなら「ソシュールの見解に従へば」詩人の対象把握の仕方を見ないで、ことばの選択、の方に注目するからである。したがって、『しみ入る』といふ語を、芭蕉が特殊の意味即ち蟬の鳴くことに使用したと考へることは当」っていない、というのである。

ここにあげた a 1 から a 4 までの時枝の考え方は、なるほど合理的な面もある。しかし、いくつかの根本的な問題を抱えている。

第一に、前述したように、各意味論は相対的で長所と短所をもつ。まず、時枝説のみならず場面論的意味論は、一般に次のような難点をもつことがあげられよう(3)。

一つは、場面がひきおこす反応は無限にあり、また話し手に応ずる聞き手の反応も無限である。それに応じた個々のパロールをどのように言語化していくのか。それは不可能であり、可能だとしても不便である。そこに、ことばの恣意性、差異、抽象化、一般化の問題が起きてくる。二つは、話し手の場面と聞き手の場面が一致する保証はない。そこに、理解とはなにかという問題が起きてくる。

第二に、時枝説に限り、まず a 2 1・a 3 1 の類義関係について論じよう。ここでは、時枝は意味の包摂関係を構造化して、外延の大きい「モノ」と、外延の小さい「ツクエ」を並列し、どちらを選ぶかという関係に置いている。時枝には、ことばの包摂関係によって語彙構造を明らかにし、「モノ」と「ツクエ」の内包の大小において対象の規定の違いを捉える視点がなないのである。(この場合、モノはツクエの上位にあって、外延が大きく、内包が小さいことはいうまでもない。)

第三に、a 2 2・a 3 2・a 3 3 の場合、時枝は、意味の重層性の問題を素通りしてしまっている。

たとえば「星」は、星そのものを指すデノテーションと、「希望」や「花」を意味する周縁の意味、すなわちコノテーションをもつ。このデノテーションからコノテーションへの意味の転用「比喩的転用」について、時枝は言語学的、修辞学的視点を示していない。ことばは、デノテ-

ションを核に、その語独自の周縁構造を持ちながら他の語と複雑な網目をつくり、ある部分は重層し、ある部分は切断している。・天上の「星」は、「星」というデノテーションと、コノテーションとしての「希望」や「花」と重なっているのである。われわれが、「AはBである」という文を述べるときAやBにあてはまる無数のことば（パラディグマ軸）から、あることばを選んで「である」ということばで結んでいる。ソシユールは、AはBであるということばの結合法則（シntagマ軸）とともに、パラディグマ軸について考察していたのである。そこに時枝との違いがある。a22の場合、「枝」を「杖」と呼んだのは、「杖」のもつコノテーションでそういったままである。もとの枝は枝でありつつ、その機能面で「杖」なのである。

だから、時枝が、ソシユールの考えでは意味とことばとは対応するから、a22の場合、「杖」ということばは、もとの枝そのものを指せなくなるので不合理だと批判したのは、パラディグマ軸を時枝が考えついでいないことを自ら明らかにしたといえるのである。

また、「杖」と「枝」に關係する記述は、重要な問題を提起している。時枝の考えによれば、ソシユール説では「杖」が枝そのものを指せなくなったのだから、「必ずしも『杖』といふ語が必要でなく、そこに、靴・机……どの語を代入してもよいと考える。それでも『杖』の意味は限定されて来ると考へ」られるのではないかと皮肉っている。この時枝の考えはノーである。机や靴は「杖」のところに代入できない。枝のかわりに杖ということばを選ばなければならないのは、本人が選ぶ前から既に制度化している社会的契約によるのであり、その契約には日本の特有の文化の構造が反映されている。これこそまさにソシユールのいうラングなのである。a21のように「場面」がことばの意味を決定するかのようによらる場合でも、話し手が対象を把握する前に、前提としてラングがあったのである。話し手が、対象把握の仕方に応じて「ツクエ」ということばを創造したのではない。

さらに、右のように、「杖」の代わりにどの語でも使えると時枝が指摘したのは、「ケガの功名」であった。それこそがまさに、ソシユールの中心思想をなす恣意性なのであって、ことばと概念との結びつきは、本来必然的な結びつきなどない。しかし、ラングにおいては、それらが必然的に結びつき、制度化する。ことばの本質は恣意的であるとともに必然的であり、必然的であるとともに恣意的である。時枝は、ソシユール学説に疑いの目を向けるそのことを通して、実はソシユール学説への入口をのぞいていたのである。しかし、時枝自身はそのことに気がつかないで終わった。もう一度、「枝」と「杖」に関する時枝の考えをまとめよう。時枝はラングの恣意性に論及したけれども、ラングの制度化、必然性、パラディグマ軸については深い考察をしていなかったのだ。

第四に、a4の比喩の問題にふれよう。

時枝が、比喩を「単なる語の選択や修辞」ではなく、「主体の素材に対する観察、味到を根柢とする」といったのは卓見であった。比喩を単なる「あや」としてレトリカルに考えるのではなく、対象への肉迫、対象認識の問題にまで引き上げたことは高く評価できる。

しかし、意味論上、いくつかの問題をかかえていた。

まず、芭蕉の句の解釈から入っていこう。

芭蕉は、この句の姿に最初からことばを定着させたのではない。

- a 初案 山寺や石にしみつく蟬の声 翁 曾良書留
 b さびしさや岩にしみ込む蟬のこゑ 芭蕉 ことがらし
 c 淋しさの岩にしみ込むせみの声 初蟬（泊船集・俳諧問答）

d 閑さや岩にしみ入蟬の声

おくのほそ道

井本農一は、「曾良書留」の句形が初案であり、「初蟬」「泊船集」「ことがらし」の句形は、杜撰な編集をやる風国のことだからかならずしも信用できないが、再案としてあったかもしれない」と述べている(4)。いま、b cを再案としてあったと仮定すると、句の構造や語詞が複雑に

変化している。たとい a d の二句だけだったとしても、同様である。a は単なる叙景であるが、d は上五に示された感慨と中七下五の叙景が映発し合つて「寂莫」の感じが出されている。中七は「石にしみつく」↓（「しみ込」）↓「しみ入（る）」と、地層の深層への浸潤が思念されて、叙景から、存在相への参入する方向が深化されている。この点について時枝は次のように述べている。

⑨芭蕉が語形の形に於いて表現した表象は、具体的事象の幾展開かした非現実的事実の上に把握したものであったかも知れない。言語過程観は、これら表象把握の展開を逆進することを許すであらう。

「逆進」ながら「表象把握の展開」をつかんだことは首肯できる。

しかし、以上のことから一つ目にあげられる問題は、やはりことばと意味との関係である。時枝の解釈は、⑨およびこれまで論じてきたことによつて、対象把握の仕方↓ことばという図式で表出をとらえようとしていた。

しかし、前掲の a ↓ (b c) ↓ d の推敲過程は、そのようにばかりはとれないことを物語っている。筆者は、表象化↓ことばと図式化する。これらは互いに他者を前提として成り立つ相即即応の関係なのであつて、対象把握の仕方からことばへという一方の「過程」をたどつたのではない。表象化がことばの推考を何度も要求したと同時に、「しみ入る」ということばが蟬の声、立石寺の閑寂という表象を決定したのである。表象化とことばとの相互作用の姿にこそ言語の現象学がある。

二つ目は、前掲 a 4 であげた、「ソシュールの見解」に対する時枝の批判についてである。この批判は、小林英夫の『言語学方法論考』からの推測によつて生まれたものであるけれども、詩人ないしは詩の定義について問題を提起している。

時枝は、詩人を「語の創造的限定者」であると見る見解に根本的修正を加えようとした。しかし、このことばの概念規定によつては、そこにこそ詩人の特性があるといえる。

ローマン・ヤコブソンは、「詩的機能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」と規定する。すなわち、パラディグマ軸―隠喩によつて、ことば同志を衝撃的に出会わせようとする。日常の慣習では結びつかないことば（事象）同志に、共通項を創造的に発生させ、そこから発する意味によつて、現実の真相をつかみだそうとする。もとよりアプリーオリな詩の原理なぞないとすれば、ヤコブソンの定義もすべての詩にあてはめるわけにはいかない。しかし、パラディグマ軸―隠喩に詩の特性をみようとすると点ではいくらか他の詩論と共通点をもっているかもしれない。「喩」によつて結合された二つのことばは、互いに意味を限定し合いながら思いがけない新しい世界を創造する。詩人が「語の創造的限定者」であるということばの内実をこのように規定すれば、そこに根本的な修正を加える必要などない。芭蕉は、彼の特有のコンテキストによつて〈世界〉に「閑かさ」を観たのであり、同時に、「しみ入る」という触覚言語を「蟬の声」という聴覚言語に結合させ、その両方を一体化したことによつて、詩人たりえたのである。

「喩」における言葉の選択が、実は〈世界〉認識なのだということをも把握するためには、「主体による素材の観察、味到」という時枝のことばを、もう一步突き破らねばならなかった。

三つめは、イメージ・想像力の問題である。

たとえば、吉本隆明は「喩」の本質を次のように捉えている。

⑩像的な喩と意味的な喩の両端があり、価値としての言語の喩の両端をふまえた球面のうえに大なり小なりそのいずれかにアクセントをひいて二重性をもつてあらわれてくる。(5)

「喩」を論ずるには、像すなわち心像とか心象とよばれるイメージを除外することはできない。そして、イメージを生む想像力、その想像力による〈世界〉把握の有効性を除外することはできない。知覚による概念的な思考とイメージによる感性的思考が補完し合うことによつて、現実を一層リアルに認識することができるのである。

こうした意味で、佐藤信夫の「喩」に関する考察は注目されねばならない。

①比喩とはイメージを想像力によって言語に新しい認識の力をあたえる手だてである以上、私達の関心もまた、じつは言語と想像力のかかりという大きな問題のなかにあるはずだ。(6)

②諷諭は混沌の現実を解説する認識行為にほかならない。(7)

「喩」を「認識行為」とする視点をもつかいなか、このことは文学をどう捉えるか、文学教育をどのように考えるかにかかわってくる。時枝の比喩論が「場面」的意味作用論にとどまったのは限界があった。また、このことは、時枝の文学的教育論の一つの限界でもあった。時枝の文学的教育論が持っていた他の限界については後述する。

注

- 1 時枝誠記「思考の表現としての言語・文章」(『教育研究』第二十一卷第七号 昭和四一年七月)
- 2 メルロワポントイ 竹内・小木訳「知覚の現象学Ⅰ」みすず書房 昭和四二年 二九九頁。
- 3 池上嘉彦「意味論」大修館書店 昭和五十年 五十頁。
- 4 『日本古典文学全集 松尾芭蕉』小学館 昭和四七年 一六九頁。
- 5 吉本隆明「言語にとって美とはなにか」角川書店 二二八頁。
- 6 佐藤信夫「レトリック感覚」講談社 昭和五三年 一〇五頁。
- 7 佐藤信夫「レトリック認識」講談社 昭和五六年 一八二頁。

五

第二の大きな課題は、読みの方法に関する問題である。

時枝の読みの方法を考察するとき、二つの視点が必要であると私は考える。一つは、「主体的立場」という、言語に対する態度についての視点である。他の一つは、「たどり読み」という、時枝の独特な文章論に

かかわる視点である。

まず、一つめの「主体的立場」から考察を始める。

既述したように、言語の本質を把握する方法には二通りあった。一つはソシュールのようにパロールを考える前提としてパロールの潜在相であるラングを、まず明らかにしようとする立場である。

これに対し、時枝は、まずパロールから出発する。つまり、言語とは、言語主体の具体的な言語活動を離れて考えることはできないから、言語活動そのものを考察の対象とするのである。このとき、ことばの使い手すなわち「言主」としてことばに対している人間の立場を、時枝は「言語に対する主体的立場」というのである。「主体」に、話し手(書き手)すなわち表現主体と、聞き手(読み手)すなわち理解主体の両方があることはいうまでもない。

時枝にとって、言語が「主体」から離れて考えられないものだとすれば、第三者の言語行為を考察するとき、その前提として、「主体的な言語を、主体的のままに、対象として把握する」いわゆる解釈作業が必要となる。たとえば、甲が「花」という一般的な語に託して「桜の花」を意味しようとしたとき、乙はともかく甲という話し手の表現過程をそのままに追体験し自分の意識の中で再構成しなければならぬ。そのうえに立つてこそ、再構成された甲のことばを第三者的に眺める「観察的立場」が可能になるというのである。ここから、時枝の重要な命題が出てくる。

③観察的立場は、常に主体的立場を前提とすることによってのみ可能とされる(『国語学原論』二九頁。)

この命題は、確かに有効な一面をもっている。しかし、次のような課題を含んでいることも事実である。

第一に、ことばを具体的な言語活動から抽象化できないとすれば、たとえば「音韻」の研究は成立しない。事実、言語過程説には、音声論はあっても体系的な音韻論はない。

第二に、「作品に対する生徒の立場は、作者に対する読者の立場（話手に対する聞手の立場）」（『続篇』）でなければならぬと規定し、文学鑑賞を「主体的立場」に限定したことである。「観察的立場」は退けられたのである。

たとえば、

⑭夕闇は道たづたづし月待ちていませわが背子その間にも見む

（万葉集巻四、七〇九）

という歌についていえば、作者大宅女の心情を第三者の立場で理解するのではなく、呼びかけられている（わが背子）の立場で、「この女性の順ひをかなへて、月の出までの暫しの間をそこに留まるか否定かの態度の決定」（『読むこと』の研究）をすることだというのである。つまり、表現とは相手に呼びかけて行動を起こさせることであり、理解とはその呼びかけにこたえて、聞き手（読み手）はどう行動するか決定することだというのである。

文学鑑賞を「主体的立場」に限定してしまう時枝の論は、あまりにも特異である。その特異さは、次の用語をどのように規定するかという問題と関係がある。「文学」「言語と文学」「言語の機能と文学の機能」「鑑賞」「文学教育」などである。これらをめぐって時枝と他の論客との間に、さまざまな論争が交わされた。このことについては含まれる問題があまりに多く、後に節をあらためて考察することにした。

次に「たどり読み」について触れることにしたい。

時枝の言語過程説は、甲から乙への思想の伝達と、乙における受容を考察する、伝達論であった。このとき、第三者が甲のことばを理解するということは、乙の立場に立って甲の体験を迫体験し、甲という表現主体に「還元」して行くことであった。こうした、没主体的姿勢が、文章展開をそのまま「たどる」受動的読みを生むことになったのは当然であった。

それでは、時枝は文章をどのように規定し、読者にどのように同調さ

せようとするのか。前述したように、垣内が文章を空間的同時的全一的構造と捉えたのを批判し、時枝は、文章を継続的、時間的、線条的構造と捉えた。文章の線条性は一般言語学の指摘するところであって時枝の独創ではない。しかし、時枝は、ベートーベンの第五交響曲における曲想の展開から示唆を得て、冒頭における主題が次々に変奏されていく姿に、文章展開の典型をみるという、独特な発想をしたのである。

しかし、ここにも、ソシュールが詩に見たアナグラムの思想を時枝は見えていない。単線性、線状性、非可逆的な顕在的な文章展開の背後に、複線、非線状性、可逆的な矛盾するものが潜んでいるのである。文章に線状（条）性だけを見ることは単純すぎるのだ。）

さて、こうした文章観から、時枝は読むということを次のように規定する。

⑮読むといふことは、文章の冒頭あるいは書き出しから、順次、読み下し、読み進めて行くことである。これは、旅行の道程を、一步一步、歩いて行くのに似てゐる。このやうな読み方の形式を、私は「たどる」と名づけた。読み方教育は、要するに文章のたどり方を教へることである。

一見すると、「たどり読み」は、読者論における読みとよく似ている。文章は全体を一気につかめないから、旅人が、風景を次々にたどり見ていくように、文章の論理的展開に即して読み進むのだという点で。しかし、「たどり読み」と読者論的読みとは決定的に違うのである。この混同は決して許されない。

一つは、読者論は、テキストと読者との相互作用であるということである。時枝のように、文章を書き手から読み手への一方向的な受容とみなすのではない。読者はテキストとの相互作用によってイメージをつくりあげ、その世界を「構成」する経験のなかで意味をとらえるのである。まさに「意味とはイメージ（比喩）の性格をもつ」のであり「意味はイメージの中にしか現れない」（イーザー）のである。読者論にある読者

とテクストとの相互作用という視点は、時枝にはない。時枝理論の基本は、テクストを「己を虚しくして」テクストに同一化するものである。「己を虚しく」するところに、「主体」などはない。読者論では、読者は「己」のコンテクストに応じて、テクストの「一貫性」を、究極的には一人ひとり別々に、多様に形成していくのである。

もう一つの点は、「主題」を論証するか否かである。「たどり読み」においては、「主題」の意味は文章の冒頭に、読者に先立って既にあるのである。そのことを前提として、文章の展開に従って、それを論証していくことを基本とする。しかし、イーザーが否定したことはまさにこの論証性であった。

さらに、時枝は、文章の時間的継起性―線条性と、読書行為とを混同するという誤りを犯してしまった。読むことは、順次にたどるのではない。作品世界の地平は、いま読んでいる先への期待と予測、いままですんだことの貯えや想起、すなわち期待と保有の交互作用によって形成されるのである。

われわれは、時枝の「たどり読み」の不合理さにまどわされてはならない。

六

ここで論の展開を再び「主体的読み」の考察に戻し、前述したような用語の規定をめぐる論争に触れることにしたい。

第一は、言語の機能に関する問題である。

時枝の『国語学言論統篇』では、『正篇』で展開された言語過程説の伝達に関する面を補い詳説している。時枝は『統篇』で言語の機能を次の三つに分類した。①伝達によって話し手と聞き手の意志を疎通させる「実用的（手段的）機能」、②互いの感情を融和親睦させる「社交的機能」、③表現それ自体が、聞き手や読み手の好悪の感情の対象となる「鑑賞的機能」（例えばリズム・擬人法などのあや、文章構成）である。そして、

時枝は、文学を「言語表現であることにおいて、通常の言語表現と區別せられる理由はない」として、言語と文学の連続説を唱えることになる。

時枝のこの言語機能観には、いくつかの疑問が投げかけられるだろう。時枝は、「伝達は、音声文字を媒材として、聞き手に概念を喚起させることによって成立する」（『統篇』）と述べているが、こうした伝達機能そのものがまず問われねばならない。ここでは、言語は、言語に先立って存在する意味を伝導し、あるいは喚起するための手段であるにすぎない。たとえば、クワントは、「こうした言語のとらえかたを、現代のもっとも有力な言語哲学はもはやうけいれてはいない。その見解が擁護されたのは過去のことである。現代の言語哲学はこの見解とのたたかいのなかで発展した①」といい、言語を伝達の手段とする考えを「あやまった見解」と否定する。第一節で述べたように、言語は伝達の単なる媒材ではなく、意味そのものであり、意味を生み出す創造力をもつものであった。

時枝の、言語機能の三分類法にも問題はないか。つまり、三つの機能に分けた基準は何であり、三つの機能の間の関係はどうなっているのか。この点について他の分類法と比較してみる。

たとえば、ローマン・ヤコブソンは、コミュニケーションに不可欠の六つの要因によって、六つの言語機能を規定した。その組み合わせは次の通りである。(1) 発信者―心情的機能、(2) コンテクスト―関説的機能(3) メッセージ―詩的機能(4) 接触交話的機能(5) コード―メタ言語的機能(6) 受信者―動能的機能。

これらは、一対一で対応する閉ざされた体系ではない。ヤコブソンは次のような「ただし」書きをつけ加えることを忘れない。

①⑥このようにして言語の六つの基本的な相を区別しても、そのうちのただ一つの機能しか果たさないような言語メッセージを発見することは、まず不可能であろう。多様性はこれら機能のいづれか一つの専制のうちにあるのではなく、それら相互の階層的順位の異なりの中に

あるのである。メッセージの言語構造は支配的機能に何よりもまず依存する。(2)

ヤコブソンの機能分類には、言語機能と要因や言語構造の関係といった、時枝にない視点がある。このヤコブソンの考察は、次の問題の検討にも示唆を与えるものでもある。

第二は、言語と文学が連続するか否かという問題である。

結論的にいえば、右のヤコブソンの分類原理に依る限り、言語と文学とを、時枝のように連続するか否かという観点から捉えることは、合理的ではない。

六つの機能のうち、関説的機能はどの言語構造の主要任務でもある。しかし、だからといって、全ての言語構造をそれで括ることをヤコブソンは否定する。文学も、関説的機能を主要任務として他の機能を合わせ持つ点では言語以外のものでありえない。しかし、文学は詩的機能を最優先順位とする一つの独自の領野だとするとき、言語と文学とを同一視することはできない。

時枝の連続説を再掲すると、「言語と文学とは、それが表現であることにおいて」「連続的なもの」であり、言語の持つ機能を文学も同じように持つという主張であった。時枝のこの発言を、ヤコブソンの考え方で批判すると、一部は正しく、一部は正しくない。

文学が言語であることは自明なことなのである。一方、文学は確かに言語とは時枝のいうように別のカテゴリーではない。しかし、文学が詩的機能を最優先とする言語構造である限り、言語一般とか他の言語構造と同一視することは許されない。「文学と言語とは連続性を持ちつつ、同時に断絶するという二重関係にある」のである。

言語と文学が連続するか否かについては、昭和二四年から三十年代後半まで、西尾実と時枝との間に論争がたびたび交わされた。西尾実は言語と文学とは非連続の連続の関係にあり、言語生活の完成段階にあるとすると主張して対峙したのである。この論争の争点を集約して図式化す

ると次頁のようになる。(3)

西尾・時枝論争は、次の図式のようにそれぞれの立論の基盤が違うだけに、結局根本的な妥協はあり得ず並行線をたどったまま終息した。したがって明確な結論はなかったが、文学の本質や指導原理について討論が掘り下げられた点では歴史的意義があった。

ただ、西尾・時枝論争は、双方の独特な用語規定を知らないで第三者的に読んだとき、奇妙に感じられる。このことは、加藤周一が『文学とは何か』で指摘している。国語教育研究者は、ヤコブソンのような言語学を視座としてこの論争を再検討し、言語と文学との関係についてだれにもすっきりと分かるような説明をすることが必要である。

第三は、文学の規定をめぐる論争である。

前述したように、文学の機能が言語の機能そのものだとするれば、時枝の文学観は自ずと決定される。

たとえば、前述の「タやみは……」の歌の「月待ちていませ」という表現にうかがわれるように、文学はもともと、相手に対する「問ひ」「命令」「誂へ」等、相手に「呼びかける文学」である、とするのが時枝の考えであった。伝達という機能を主とする日常の言語表現と本質的に同じだとするのである。

時枝は、しかし、日本文学には、たとえば「み吉野の象山のまの木ぬれにはここども騒ぐ鳥の声かも」(万葉集九二四)などのように、自然や意識に対する観照的態度に基づく「眺める文学」があることを認める。時枝はそのうえで、日本文学が勅撰集の文学観を経て観照性に偏る傾向にあったことを批判し、俳諧などにおける「呼びかける文学」が復権したことを例証する。

時枝の理論は、岡崎文芸学を主に批判の対象にしている。岡崎義恵が芸術と言語とを区別し、言語の中に宿る思想の美を観照的に考察しようとしたことに反対したのである。時枝の岡崎批判は次のような普遍的意味をもつ。文学を日常生活のなまなましい言語活動として見ることから

西尾	時枝	言語教育との関連 一体である	方 法	鑑 賞	C 文 学 教 育	言語生活論 完成段階として の文学	非連続の連続 完成段階として の文学	ことばの芸術 形象的思惟 主体的真実の独白性	言語全ての機能が 發揮される人間変革 人間形成	言語生活論 形成 人間形成	西尾	時枝	言語理論	言語と文学	文 学	文学は言語を媒材とする表現で もなければ言語芸術でもない。 言語そのもの	実用的伝達機能のみ	基礎学	目 標	主 義	A 言 語 理 論	B 国 語 教 育 (学)
西尾	時枝	言語教育の 完成段階極致	発達段階に 応ずる多面的	鑑賞体験こそ 文学教育である	文学研究 国語教育学	国語教育の 完成段階極致	発達段階に 応ずる多面的	鑑賞体験こそ 文学教育である	国語学 分析主義	国語教育学	西尾	時枝	言語理論	言語と文学	文 学	文学は言語を媒材とする表現で もなければ言語芸術でもない。 言語そのもの	実用的伝達機能のみ	基礎学	目 標	主 義	A 言 語 理 論	B 国 語 教 育 (学)

出発しようとした点で。また、文学を思想や美をあらわす特殊なカテゴリーとして扱い、表現よりも内容を偏重しがちな文学受容に対して反省を促している点で。

詩のアプリオリな原理がないと同様、文学にもアプリオリな原理がないとすれば、時枝の文学理論の是非を判断する基準がないことも確かである。しかし、時枝の文学論にさまざまな問題点のあることも否定できない。

一つは、文学を「呼びかける文学」と「眺める文学」に二分した、分類基準の狭さがあげられる。これによって今日の多様な文学作品の特性を括することはできない。

二つは、「呼びかける文学」を列挙することによって、言語過程説については言語の実用的伝達機能に文学を結びつけ、文学の実用的伝達機能を強引に実証した点である。

三つは、日常のあいさつと文学とは明らかに違う点である。ただ、その相違点は、前掲図式の西尾のように文学の特性を「形象的思惟・主体的真実の独自性」におくのか、高木市之助のように「創造的経験」に置くのか、論者によって異なることは予想される。しかし、その相違点が表層的な叙述のレベルにとどまらないことは、西尾・高木の発言からも共通してうかがえることである。

四つは、時枝の文学観である。

時枝は確かに、言語と文学の連続性を唱えたけれども、ある表現が「芸術性」「鑑賞性」を美用性ととも備えていることを否定したのではなかった。われわれは、このことに留意しなければならない。しかし、「文学は、ある修飾語を以て限定された言語である」と、「修飾」に「芸術性」「鑑賞性」を限ったことに問題があった。

時枝は文学を、その内容たる思想や感動にあるのではなく、それを「表現にまで持ち来たす一切の作用」とみる。そのこと自体は正しい。しかし、時枝が依ったのは、万葉集を憧憬する歌学書であり、そこから文学を次のように定義するのである。

⑦文学は、言語の匂ひゆく姿において把握されるものであり、折目正しい言語であり、綾ある言語である（『続篇』一一〇頁。）

時枝のいう鑑賞性ないしは「鑑賞的機能」とは、表現の形式美・感覚美である。具体的には、もじりなどの滑稽感、比喩の面白さ、韻律、整然とした構成、観念間のハーモニーがもたらす快さなどであり、「折目正し」さ、「綾」といった感覚的レベル、表層的な叙述のレベルにとどまっている。

「文学を文学たらしめるものは、思想性そのものでなく、また、眺められた感動そのものでもな」として、時枝が文学に求めたものが、言語表現の喚起する感覚的快覚であったとすれば、時枝は文学の機能を真に認識していなかったといえる。たとえば、時枝にとって「喩」はあくまでも「緩」なのであり、「喩」がもたらすはずの「混沌の現実を解読する認識行為」は、時枝の視野に入っていなかった。

以上のように、時枝によれば、文学とは、伝達という実用的目的に資し読者に行動を喚起する行動主義の立場で捉えられるべきものであった。そして文学の特性は表現の形式美のみに認められた。こうした卑小化され狭小化された文学観で、文学の読みを、追体験をもって了とする「読解」に解消していったとすれば、時枝はここでも大きな誤りを犯したことになる。文学テキストの読みは、文学テキストを読む独自の方法によ

らねはならない。

第四は、「鑑賞」の規定をめぐる論争である。時枝は、『続篇』の段階では、形式美としての「鑑賞性」を文学に認めていた。ところが後には、竹内敏雄編修の『美学事典』により、鑑賞＝観照と捉え、文学の鑑賞を否定することになる。

時枝が、文章を「観照」的に読むことを否定するのは、『正篇』における「主体的立場」と「観察的立場」という言語研究の態度にまで遡る。言語を言語活動として捉えようとする時枝にとって、「主体的立場」を前提としないで、言語を客観的に抽象化して研究する態度は許されないことであった。日常のことばの生活では、聞き手は、話し手の意図を正しく理解し、諾否去就の態度を決定し、それに対する行動を起こさなければならぬ。時枝にとって文学を読むことも、この聞き手の立場―読者の立場に立たねばならないとする。時枝にとって、「文学を受容する立場」といふものがあり得ない」のである。

時枝の鑑賞否定論に対して、岡崎義恵は文学鑑賞擁護の立場から、時枝の言語過程説にまで遡って根底から批判し、鑑賞が読解に解消できないことを主張した。

岡崎のいうように、具体的な直接的な作用や影響を即座に及ぼし合う話しかけと違って、文学受容では、読者が作品と距離を置いて静観し、鑑賞することが、可能である。岡崎によれば、「鑑賞とは美的対照を観照し、享樂し、その美的価値を判定する心の作用」であり、読者はこの鑑賞の状態において「美意識を獲得」するのである。(5)

鑑賞ということばが通俗的用語であって、その規定が確定しない以上、鑑賞をどのように概念規定するかによっては、鑑賞ということばの意味にはかなりの巾がゆるぎられて、時枝説も正しいように見える。

しかし、長谷川泉は、鑑賞＝観照とする時枝説が、『美学辞典』の誤読であることを指摘する(6)。「美学辞典」には、鑑賞と観照は受容的美

意識をさすことは同じであっても、鑑賞が芸術作品を対象としその意味内容に対する積極的な価値認識の意味をふくむ意味で、観照とは混同されるべきでないことを、長谷川は考証している。この〈特に積極的な価値認識の意味をふくむ〉という、主体の積極的な判断作用を時枝説では抹殺されてしまっていることの重要性を、長谷川は強く指摘するのである。時枝説は、『美学辞典』の誤読という「手もとの狂い」によって、またしても「終末点に大きな誤差を生ずることになった」（長谷川泉）のである。

この時枝の犯した「誤差」に気づかず、時枝の鑑賞否定論を是認したり、推進したりすることに、われわれは決して与してはならないのである。第五は、文学教育の認定の問題である。

時枝は、『統篇』で、国語教育における文学教育について、次のように述べている。

⑧国語教育において、文学教育を、特立させ、これを主張する根底には、言語は形式であり、文学は内容に関するものであるとする考へ方がある。これをつきつめて行けば、言語は、思想（意味）と音声との結合体であるとする言語観にも連なるのである。音声教育や文学教育や文法教育は、国語の形式面の教育であって、それだけでは、国語教育の反面しか達成されない。それを補ふものとして、文学教育が必要であるとされるのである。このやうな意味における文学教育の主張には、専ら文学作品の与へる思想感情が考へられ、そこに、国語教育が、人間形成に關与する面があるとされてるのである。従って、この意味における文学教育は、作品の持つ思想感情を、生徒に植付ける感化主義へと傾いて行くのである。そして、文学教育として、最も重要と考へられる表現についての教育の正しい位置づけを見出すことが困難になるのである。（二二二頁）

今日では、ここに示された時枝の心配も大分なくなつた。内容と形式を二分し（b）、作品の表現構造を軽視して（g）思想感情だけを味わ

い（d）、文学教育だけが人間形成に与るがゆえに（e）、文学教育を特立さすべきだ（a）と主張する人間はいないだろう。感化主義（f）への傾きはなくなり、表現についての教育へも正しく位置づけられているといえる（g）。

⑩にみられる時枝の警鐘は傾聴すべき価値はある。しかし、それはcのようなソシュール否定↓言語過程説の主張といった条件をはずしたときである。

これまで考察してきたように、言語過程説の形成過程の「誤差」によって、そこから導かれた時枝の国語教育論は、さまざま大きな誤差を生じてきた。その誤差を基盤に、文学から内容を排除したり、表現構造に即した意味内容を鑑賞することを拒絶しようとする、いわゆる文学教育否定論であつたならば、われわれはその不合理性を鋭く突かなければならない。もし、文学教育否定論が時枝の立論に連なるものであつたならば、その立論の根拠の正しさを、諸科学の進展に照らしてその最も進んだ地点から立証する必要があるだろう。

注

- 1 クワント『言語の現象学』（長谷川・北川訳）せりか書房 昭和四七年 三頁。
- 2 R・ヤコブソン 田村すず子他訳『一般言語学』みすず書房 昭和四八年 一八八頁。
- 3 高木市之助『国語学と国文学』（国語教育のための国語講座 第8巻『文学教育』六三頁。）
- 4 後藤恒允『西尾実国語教育論の精神と実践―心の真の通い合いをもとめて―』私家版 昭和五八年 一九九頁。
- 5 岡崎義恵『文芸の鑑賞と言語の誤解』（東北大学『文芸研究』第五十集 8頁）
- 6 長谷川泉『近代文学研究法』明治書院 昭和四一年。